九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学が運営する地域スポーツ教室の楽しさの検討 ：保護者の視点に着目して

元嶋，菜美香
長崎国際大学人間社会学

宮本，彩
環太平洋大学体育学部

神野，周太郎
長崎国際大学人間社会学部

熊谷，賢哉
長崎国際大学人間社会学部

他

https://doi.org/10.15017/4372018

出版情報：健康科学. 43, pp.89-94, 2021-03-25. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

健　康　科　学
Vol.43, 2021 年 3 月

－原　著－

大学が運営する地域スポーツ教室の楽しさの検討
－保護者の視点に着目して－

元嶋菜美香 [1)2)*], 宮本彩 [3)], 神野周太郎 [1)], 熊谷賢哉 [1)], 宮良俊行 [1)]

Examination of the enjoyment of university-run community sports classes
- Focusing on the perspective of parents -

Namika MOTOSHIMA[1)2)*], Aya MIYAMOTO[3)], Shutaro JINNO[1)],
Kenya KUMAGAI[1)], and Toshiyuki MIYARA[1)]

Abstract

In recent years in Japan, there has been a demand for community sports clubs which can meet the diverse needs of residents as well as the development of a new community sports system. Although enjoyment is an important factor for people to continue participating in sport, few studies have considered the enjoyment factor in community sports. This is because the development of community sports clubs has been delayed due to the importance placed on single event competitive sports. The purpose of this study is to obtain basic knowledge for the factors concerning people's enjoyment of community sports classes.

Parents who participated in or spectated at community sports classes were targeted for this study. At the end of each class, the subjects were asked to describe the factors that induced enjoyment during the participation in community sports. The descriptions obtained were classified by three researchers with knowledge of community sports using the KJ method.

Eighty-three descriptions were obtained from parents, which were classified into five groups: leader, program, interaction, achievement, and emotion. Factors such as instruction, achievement, and emotion are partially overlapped with the factors that brought enjoyment during conventional physical education classes. On the other hand, factors such as interaction and program showed some differences from those of conventional sports activities. Interaction is, however, a keyword and presumed to be a unique factor of community sports clubs in Japan.

***Key Words*:** community sports class, enjoyment, parents

(Journal of Health Science, Kyushu University, 43: 89-94, 2021)

1）長崎国際大学人間社会学部　Faculty of Human and Social Studies, Nagasaki International University, Nagasaki, Japan.
2）九州大学大学院人間環境学府　Graduate School of Human-environment Studies, Kyushu University, Fukuoka, Japan.
3）環太平洋大学体育学部　Faculty of physical Education, International Pacific University, Fukuoka, Japan.
*連絡先：長崎国際大学　〒859-3298　長崎県佐世保市ハウステンボス町 2825-7　Tel：0956-20-5527
*Correspondence to: Faculty of Human and Social Studies, Nagasaki International University, 2825-7,　Huis Ten Bosch, Sasebo, Nagasaki, 859-3298, Japan.
Tel: +81-956-20-5527　E-mail: motoshima@niu.ac.jp

緒言

1. 大学が運営する地域スポーツの重要性

スポーツクラブや運動部活動に所属する子どもは4～11歳の児童において約6割にのぼり、中学校期以降では学校の運動部活動に所属する生徒が最も多い一方で、幼児期から児童期においては民間のスポーツクラブや地域のスポーツクラブが子どものスポーツ環境を支えている[1)]。地域スポーツの明確な定義はこれまで行われていないが、地域スポーツ推進研究会[2)]は、わが国のスポーツクラブを学校スポーツクラブ（中学校・高等学校の部活動や大学の運動部など）、職場スポーツクラブ（企業のサークル・同好会など）、地域スポーツクラブ（スポーツ少年団、家庭婦人バレーボール、お年寄りゲートボールなど）、民間スポーツクラブ（スイミングスクール、フィットネスクラブ）の4つに分類し、これまでの学校や職場を中心としたスポーツクラブづくりから、社会の変化に伴い地域に根ざしたスポーツクラブづくりの重要性を指摘している。また、作野[3)]は、競技志向が強い民間のスイミングクラブやバレエ教室を「民間スポーツクラブ」、競技志向の強いJクラブの下部組織であるジュニアユースなどを「競技志向の強い地域クラブチーム」、総合型地域スポーツクラブなどを「エンジョイ志向の地域スポーツクラブ」として、地域スポーツクラブの多様化について言及している。

子どものスポーツ環境の整備のために、大学が有するスポーツ資源を活用することが望まれている[4)]。多くの大学が、スポーツイベントやスポーツ教室の開催・指導、総合型地域スポーツクラブの運営、スポーツ関連の講演会や部活動へのスポーツボランティアの派遣など、大学が有するスポーツ資源を活かした地域貢献を果たしている[5)]。専門的かつ多様なスポーツ指導が行える大学生や指導者、多様な種目を実施することができる用具や施設を有する大学は、子どもの地域スポーツの発展に寄与すると考えられる。また、競技成績の高いクラブが競技力向上を目的とした指導を行うスポーツ教室や普段スポーツ機会の少ない子どもたちを対象にしたレクリエーション要素の高いスポーツイベントのように、多様な競技志向を持つ子どもたちに対応できる。

2. 子どものスポーツ継続に関わる楽しさ

子どものスポーツ継続意志には、楽しさが最も強く関係すること[6) 7)]、様々な要因が楽しさを媒介として継続意志に影響を与えることが示されている[8) 9)]。スポーツにおける楽しさに関しては、大学生を対象としたスポーツ全般の楽しさ[10)]、高校生を対象とした部活動の楽しさ[11)]、小学生と大学生を対象とした体育授業の楽しさ[12)]、小学生を対象とした野外活動としてのキャンプの楽しさ[13)]などがあり、対象者や実施形態による独自の楽しさを明らかにしている。一方で、子どもの楽しさは発達年代によって変化することが明らかとなっているが[14)]、小学生を対象とした研究は妥当性・信頼性の観点から十分に調査が進んでいるとは言えない。

地域スポーツの楽しさについては、総合型地域スポーツクラブにおける楽しさとして松林・山口[15)]がPhysical Activity Enjoyment Scale[16)]を和訳した調査用紙をもとに調査を実施したが、児童生徒を対象とした尺度の妥当性を検証しておらず、総合型地域スポーツクラブの参加者と非参加者との比較にとどまっている。しかし、実際に地域スポーツに参加している幼児期から小学校期の児童は、「地域スポーツの楽しさ」という曖昧な概念を明確に言語化すること、一般的な運動・スポーツの楽しさとの差異を明らかにすることが非常に難しい。子どもの楽しさを対象とする調査研究[17) 18)]では、予備調査として先行研究や種目特性を指導者や研究者が推測して調査項目を選定し、子どもを対象に調査を行うことで妥当性を検証するといった手法が用いられている。また、幼児期の遊びの楽しさに関する研究では、最も身近で子どもの様子を観察している保育者（幼稚園教諭）の視点に着目し、保育者自身がどのように遊びの楽しさを捉えているかを明らかにし[19)]、実際の幼児行動を捉える尺度を作成している[20)]。地域スポーツにおいては、子どもの行動や態度、表情を間近で観察している保護者は、子どもの楽しさを推測し、代理的に言語化することができると推測され、その結果をもとに調査尺度を作成し、参加者に整合性を確認するといったプロセスは重要である。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、大学が運営する地域スポーツの楽しさを抽出することである。この目的のために、保護者の視点に着目し、N大学にて実施した子どもを対象とした地域スポーツ教室の楽しさを明らかにする。なお、本研究において対象とした「地域スポーツ教室」は大学が提供するスポーツ環境のうち、作野[3)]が定義するエンジョイ志向の地域スポーツにおいて、参加者が一過性ではなく継続的に行うスポーツ活動とする。

方法

1.　対象

令和元年度に N 大学にて実施された近隣に住む児童およびその保護者を対象とした地域スポーツ教室に参加・帯同した児童の保護者を対象とし、のべ 133 サンプルを回収した。保護者の属性は、男性 23 名、女性 98 名、未記入 4 名、年代は 30 代 39 名、40 代 78 名、50 代 4 名、未記入 4 名であった。参加形態に関して、39 名が「スポーツ教室の活動に子どもと一緒に参加した」、81 名が「活動には参加せず見学した」と回答した。種目経験に関して、19 名が「クラブ・部活動などで専門的な指導を受けたことがある」、58 名が「数回体験したことがある」、43 名が「まったく体験したことがない」と回答した。

2.　実施内容

対象とした地域スポーツ教室は、性別や年代、運動経験を問わず多様な地域住民が参加し、複数のスポーツ種目を体験することを目的として開催された。体育館などの大学施設を使用して土曜日の 19 時から 21 時に 1 回 1～2 種目のレクリエーションスポーツを 2 時間程度行い、計 10 回のスポーツ教室を実施した。実施期間は、令和元年 6 月 1 日から 11 月 16 日であった。実施したスポーツ種目は、アーチェリー、親子体操、サッカー、ソフトボール、武道（空手道・剣道）、バレーボール、ラケットスポーツ（卓球・バドミントン）、運動会であった。各プログラムの作成およびスポーツ指導は、大学教員、運動部に所属する大学生、教職課程に所属する大学生、スポーツクラブの指導者などが担当した。

3.　調査内容

保護者に対して、地域スポーツ教室参加後に地域スポーツ教室の楽しさについて「今日のスポーツ教室（実際の教室名）の「楽しさ」は、どんなことだと思いますか？「楽しくなかった」と思われた場合は、その理由を自由に記載してください。」という問いに対して自由記述で回答を求めた。

4.　分析の手順

地域スポーツ教室実施後に保護者から得られた回答に対して、自由記述から「地域スポーツの楽しさ」という新たな知見を得るために、KJ 法を用いた記述の分析を行った。KJ 法にはいくつかのバージョンがあるが、1997 年版の KJ 法をもとに作成された手順を踏まえ[21]、大量の質的データを分類した先行研究[22]を参考に、地域スポーツに知見のある 3 名の大学教員がカテゴリー分析を行った。

記述は二文以上にわたる文章や一文の中に内容が異なる文言が含まれている文章がみられたため、3 名の合議をもとに切片化した（以下、ローデータとする）。ローデータに対して、それぞれ類似したそれぞれのローデータを集めてまとまりをつくり、まとまりごとに名前を付けた（以下、コードとする）。次に、類似した複数のコードを統合し、複数のコードからなるまとまりを形成し、名前を付けた（以下、サブカテゴリーとする）。さらに、類似するコードを統合し、より大きなまとまりを形成し、名前を付けた（以下、カテゴリ―とする）。より適切なコード・サブカテゴリーを統合する、既存のコード・カテゴリーを解体して別のサブカテゴリーに配置するといった作業を繰り返し行った。以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを〈　〉、コードを『　』、ローデータを「　」で示す。

5.　倫理的配慮

本研究を行うにあたり、長崎国際大学人間社会学部国際観光学科研究倫理委員会の承認を得た。対象者に対して、調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を書面もしくは口頭にて説明し、保護者自身もしくはその家族の同意が得られなかったデータ（8 サンプル）は分析の対象から除いた。

結果

保護者より得られた 83 の記述を切片化した結果、125 のローデータに分けられた。分類の結果、『はじめて』、『種目特性』、『協働』などの 24 のコードが抽出され、〈指導法〉、〈体験・挑戦〉、〈指導者との交流〉など 12 個のサブカテゴリ―に分類された。類似したものをまとめてカテゴリーを形成したところ、【指導者】、【プログラム】、【交流】、【達成】、【感情】の 5 個のカテゴリーへと集約された（表 1）。また、5 つのカテゴリーは図 1 のように時系列に沿って配置された。

図 1　大学が運営する地域スポーツ教室の楽しさ

表1 保護者より得られた大学が運営する地域スポーツ教室の楽しさ（ローデータを一部抜粋）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	ローデータ
指導者(20)	指導法(9)	賞賛(5)	学生さんに教えてもらい、ほめてもらうこと。自己肯定感につながる。
		レベル(4)	レベルに合わせた教え方をしていたので楽しめたと思う。
	接し方(11)	雰囲気(5)	学生スタッフの笑顔と雰囲気がとてもよかったです。
		ホスピタリティ(6)	丁寧に教えていただけとても楽しかった。ありがとうございました。
プログラム(49)	体験・挑戦(23)	はじめて(11)	初めてのスポーツに挑戦できる。
		普段できない(8)	普段できないスポーツを体験できる。
		ヘタでも楽しい(4)	未経験者でもなんとなくでも打てる、投げられるプログラムになっていたと思う。
	種目(26)	多種目(6)	1つのことだとあきてしまいますが、たくさんの内容でしたのでいきいき楽しく活動をしていました。
		種目特性(9)	1つのボールをみんなでつなぐバレーという競技であったから。
		レクリエーション(2)	ゲーム感覚で
		ルールの工夫(3)	大きいボールを使って誰でも打ちやすくされていたり簡単なルールにしてもらえたので楽しかったと思います。
		試合(4)	試合が楽しそうでした。
		運動量(2)	かなり身体をうごかせてとても楽しかったです。またお願い致します。
交流(24)	指導者(8)	大学生(7)	スポーツを通し学生の方との交流も楽しんでいた。
		教員(1)	人数が少なかったこともあり、先生と話を落ち着いて聞きやすかったと思う。
	参加者(5)	友だち(4)	ほかの小学生と一緒にスポーツをしてとても楽しめていい時間を過ごせました。
		保護者(1)	ほかの保護者の方とのかかわり。
	関係者(11)	協動(11)	いろいろなレベルの人とスポーツをするところ。
達成(14)	できた(11)	できたよろこび(11)	参加して挑戦したことが少しずつできるようになることかなと思う。
	わかった(3)	コツの理解(1)	とび箱・マット・運動のコツがわかった?! ので良かったです
		ルールの理解(2)	ソフトボールのルールがわかってよかった。
感情(13)	運動後(4)	笑顔(2)	みんなが笑顔
		発散(2)	声を出して力を出して発散できたこと
	運動中(9)	運動に対する取り組み(9)	ボールを一生懸命に追いかけていました。夢中になれているということが楽しいということかなと思いました。
否定的(1)			バトミントンはあてることがかなり難しいようだったので楽しさをかんじられたかはわからない。
感想(2)			子どもが楽しんで参加できたので、良かったです。
不明(2)			先生が上手だった。

考察

分析の結果抽出された5つのカテゴリーから、保護者が考える大学が運営する地域スポーツ教室の楽しさは、【指導者】による【プログラム】の実施により【交流】が生まれ、【達成】や【感情】を得ることであると推測される。以下、それぞれのカテゴリーについて考察を行う。

【指導者】カテゴリーは、体育授業における楽しさ[17]や期待・感情[23]につながる要因であるが、単なる教員や指導者としてではなく大学生が指導を担当することにより、学校体育やスポーツクラブにおける教師や専門的指導者による指導とは異なる楽しさが提供できる可能性が推測される。スポーツ指導者の質としては専門的指導者に劣るが、子どもに近い視点で丁寧に指導を行う指導学生の様子を保護者が評価したと推測され、大学が運営する地域スポーツ独自の楽しさであると推測される。

【プログラム】カテゴリーは、体育・スポーツの楽しさである「挑戦」[10) 12)]と近しい内容であるが、『はじめて』、『普段できない』、『多種目』などの内容は従来の運動・スポーツの楽しさとは一部異なると考えられる。多くの総合型地域スポーツクラブでは、武道やソフトテニスなどの学校体育授業で実施されないことが多い種目を実施し、約60%のクラブでは6種目以上のスポーツ活動を提供しており[24]、本研究においても保護者は子どものスポーツ経験を把握したうえで地域スポーツ教室の独自性を評価したと考えられる。一方で、バレーボールやラケットスポーツなどの比較的ゲーム性の高い種目では試合などを取り入れることで、多様な志向性をもつ参加者に対応することができると考えられる。

【交流】カテゴリーは、体育・スポーツの楽しさである「交友」[10]や「人間関係」[12]と近しい内容ではあるが、指導者としての指導学生や大学教員、参加者としての子どもや保護者が性別や年齢を問わずともに活動できる楽しさは体育授業や部活動ではみられない。また、交流の対象として全体的な参加者を示す〈関係者〉につ

いで、〈指導者〉としての『大学生』が挙げられたことから、大学が有するスポーツ資源である指導学生が楽しさにつながる要因であることが示され、大学が運営する地域スポーツ教室独自の楽しさが明らかになったと考えられる。また、〈指導者〉〈参加者〉〈関係者〉などの対象者を示すサブカテゴリーと「交流」「かかわり」「一緒に」などのかかわりを示す語や語が多く見られた。多様な参加者とともにスポーツを行う地域スポーツでは、誰とどの程度接するか、かかわるかが均一でなく、既知の友達との深いコミュニケーションや協力する場面もあれば、地域の方とのふれあいや話す程度の交流も含まれる。同様の競技志向をもつ子どもたちとの単一の競技スポーツクラブや同学年の子どもたちを対象とした学校体育では得ることのできない地域スポーツ独自の楽しさであると考えられる。

【達成】カテゴリーは、体育・スポーツの楽しさである「技能習得」[10]や「進歩・向上」[12]と近しい内容であり、スポーツの本質的な楽しさであると考えられる。本研究にて対象とした地域スポーツ教室の保護者は競技性や勝利主義よりもレクリエーション性を重視しており、スポーツ特有の勝敗を決することにはそれほど楽しみを見出していないと推測され、対象とするスポーツ教室の志向性や参加者の特性によって異なると考えられる。

【感情】カテゴリーは、体育・スポーツの楽しさである「開放性」[10]や「運動の基本的欲求充足」[12]と近しい内容であり、運動・スポーツの継続に重要な「運動それ自体を楽しむ」ことを示している。スポーツに打ち込むこと[25]やスポーツによって快感情を得ることはスポーツ継続に重要な要因であり[26]、地域スポーツ教室においても根幹的な楽しさであると考えられる。

本研究の課題と今後の展望

本研究の課題として、対象とした保護者が、参加者と見学者のどの視点にて回答したかが不明確であったことが挙げられる。本研究で得られた要因は、あくまで保護者が推測した地域スポーツ教室の楽しさであり、子どもたち自身から言語化された結果ではない。また、保護者自身が子どもともに地域スポーツ教室に参加して感じた楽しさが含まれている可能性がある。今回得られた調査項目を使用し、子どもたちの「するスポーツ」としての地域スポーツ教室の楽しさを検証する必要がある。

次に、保護者の年代や運動経験による比較検討が行えていないことが挙げられる。自身がスポーツに対して競技的要素を重視する保護者は総合型地域スポーツクラブにおける子どものスポーツ活動に対しても競争心を養うことや将来の活躍を期待することが示されており[27]、保護者の属性によって感じる「楽しさ」に差異があると推測される。同様に、エンジョイ志向の一地域スポーツ教室を対象としていることから、対象とした地域スポーツ教室が少なく、競技志向のクラブとの比較検討ができていない。大学が運営する地域スポーツ教室の分類とともにその保護者の考える「楽しさ」との関連を明らかにすることで、保護者が地域スポーツ教室を選ぶ際に有益なクラブの志向性とその楽しさを明確に示すことができると考えられる。

加えて、保護者から得られた否定的な意見に対する考察が行えていないことが挙げられる。楽しさは継続意志につながる重要な要因であることから、地域スポーツ教室に対する否定的な意見については十分に検討し、運営や指導等を改善する必要がある。また、地域スポーツ教室への子どもの継続行動との関係を明らかにすることで、地域スポーツ教室の継続につながる楽しさやニーズを明確化し、地域スポーツ教室の課題を明らかにすることができると考えられる。

まとめ

本研究では、大学が運営する地域スポーツ教室の楽しさを抽出することを目的として、地域スポーツ教室に参加・帯同した保護者から得られた楽しさに関する記述を分類した結果、【指導者】による【プログラム】のなかで多様な参加者が【交流】すること、プログラムを通して得られた【達成】や【感情】に楽しさを見出していることが示唆された。体育・スポーツの楽しさと比較して、指導者の特性および多様な参加者との交流は地域スポーツ教室独自の楽しさであることが示唆された。

付記

本稿の要旨は、The 24th annual congress of the European College of Sport Science(Seville) において発表したデータを再分析し、一部加筆・修正した。

参考文献

1)笹川スポーツ財団(2019): 子ども・青少年のスポーツライフデータ 2019. 笹川スポーツ財団, pp.85-99.
2)地域スポーツ推進研究会(1999): スポーツクラブのす

すめ—豊かなスポーツライフの実現に向けて—.（株）ぎょうせい, p.28.
3)作野誠一(2011): 学校運動部のジレンマ—スポーツクラブとの共存は可能か—. 現代スポーツ評論，24: 63-75.
4)文部科学省(2017): 大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ～大学スポーツの価値の向上に向けて～. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/1383246.htm
5)スポーツ庁(2018): 平成 30 年大学スポーツの振興に関するアンケート調査結果概要 http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/1404336.htm
6)Scanlan, T. K., Simons, J. P., Carpenter, P. J., Schmidt, G. W., & Keeler, B. (1993b): The Sport Commitment Model: Measurement Development for the Youth-Sport Domain. Journal of Sport & Exercise Psychology, 15(1): 16-38.
7)Weiss, M. R., Kimmel, L. A., and Smith, A. L. (2001): Determinants of sport commitment among junior tennis players: Enjoyment as a mediating variable. Pediatric Exercise Science, 13(2): 131-144.
8)Weiss, M. R., A. J. Amorose(2008): Motivational orientations and sport behavior. In T.S. Horn (Ed.) Advances in sport psychology (3rd ed). Champaign, IL: Human Kinetics.pp.115-155.
9)久崎孝浩，石山貴章 (2012): スポーツに参加する 子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響: その研究 動向と今後の方向性．応用障害心理学研究，(11): 45-67.
10)和田尚(2008): 楽しさの構造, 日本スポーツ心理学会(編),日本スポーツ心理学辞典．大修館書店, pp.273-274.
11)山形県高等学校体育連盟研究部(2016): 生徒が感じる運動部活動の楽しさと顧問の意識差について－運動部生徒と顧問の意識調査から－ http://www.yamagata-koutairen.jp/katudo/kenkyu.html
12)徳永幹雄，橋本公雄(1980): 体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究．健康科学，2: 75-90.
13)西田順一，橋本公雄，柳敏晴，馬場亜紗子(2005): 組織キャンプ体験に伴うメンタルヘルス変容の因果モデル--エンジョイメントを媒介とした検討. 教育心理学研究，53(2): 196-208.
14)森司朗(2003): 幼少期における運動の好き嫌い. 体育の科学，53(12): 910-914.
15)松林祐理子, 山口泰雄(2015): 総合型地域スポーツクラブでの活動が児童のメンタルヘルスに及ぼす影響について:エンジョイメントに着目して．身体行動研究，4: 35-40.
16)Motl RW, Dishman RK, Saunders R, Dowda M, Felton G, Pate RR. (2001) : Measuring enjoyment of physical activity in adolescent girls. American Journal of Preventive Medicine. 21(2):110-117.
17)千駄忠至(1989): 小学校における体育授業の楽しさに関する研究—各運動教材の楽しさの種類と因子構造について—. 日本教科教育学会誌，13(2): 61-67.
18)筒井清次郎, 天野彰夫(1991): 鉄棒運動の楽しさに関する研究．愛知教育大学研究報告 芸術･保健体育･家政･技術科学，40: 47-57.
19)大森洋子，川口政宏(1992a): 遊びにおける子どもの楽しさの研究-保育者は「楽しさ」をどのようにとらえているか-．研究論叢第 3 部芸術・体育・教育・心理，41: 247-254.
20)大森洋子，川口政宏(1992b): 遊びにおける子どもの楽しさの研究-2-楽しさ評定尺度による分析を通して. 研究論叢第 3 部芸術・体育・教育・心理，42: 243-252.
21)田中博晃(2013): KJ 法クイックマニュアル．外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2012 年度報告論集，102-106.
22)平野真理，綾城初穂，能登眸，今泉加奈江(2018): 投影法から見るレジリエンスの多様性:回復への志向性という観点．質的心理学研究，17: 43-64.
23)西田保(2004): 期待･感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究．杏林書店, pp.66-99.
24)スポーツ庁(2019): 平成 30 年度総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果概要 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/list/detail/1379861.htm
25)萩原悟一, 磯貝浩久(2014): 競技スポーツにおけるコミットメントの検討—日本語版スポーツコミットメント尺度の作成—．スポーツ心理学研究，41(2): 131-142.
26)橋本公雄, 斉藤篤司(2015): 運動継続の心理学 快適自己ペースとポジティブ感情．福村出版, pp152-163.
27)備前嘉文(2018): 親のスポーツ観と子どものスポーツ活動に対する期待との関係について．國學院大學人間開発学研究，9: 1-10.